

「学術情報の国際発信力の強化」

オックスフォード・ブルックス大学／大谷大学 ジョン・ロブレグリオ

イギリスのオックスフォードブルックス大学にて、日本学の授業を担当し、特に日本宗教史と日本現代史を専門に教えています。去年8月の終わり頃から東方仏教徒協会の刊行する『The Eastern Buddhist』という仏教の専門雑誌の編集者の役も務めています。経験はまだ少なく、まだまだ素人です。グリーン先生と比較もできない、1年間の経験しかないため、今日はお役に立つ情報をお伝えできるかわかりませんが、学術情報の国際発信力強化に関してできるだけお話したいとおもいます。

今日の発表は、恥ずかしいほど当たり前の二つの要点についてお話します。二つの要点——第一に、論文は文法的に正しくきれいな英語で書かれないといけないということ、第二に、論文はオンラインでアクセスできることが必須だということです。実は今日の発表の要点はそれだけです。ある意味ではここで発表が終わってもよいかとも思いますが、そうすると皆様があっさりされる気がしますので、この二つの点について私の限られた体験からもう少し詳しく述べようと思っています。

I 二つの問題

まず、『The Eastern Buddhist』を簡潔に紹介いたします。『The Eastern Buddhist』は、1920年に鈴木大拙が創立した専門雑誌です。したがって、なかなか歴史のある雑誌です。鈴木大拙だけではなく、20世紀の有名な学者の多くが協力して編集者の役割も果たしてきました。1921年が第1巻で、戦争の終わりから60年代にはそれほど多くは発行されていませんでしたが、1965年からまた発行されるようになりました。久松真一という先生、仏教の禅宗の専門家も協力して、真宗の割と有名な学者たち、例えば金子大栄、曾我量深も大きな役割を果たし、哲学としては、京都学派の西谷啓治も大事な役割を果たしました。

1. 論文の質と経済的な問題

しかし、もう何年間も業績不振の状況が続いております。残念なことです。そして私のこれからの仕事は、この業績不振の状態をなんとか改善することと考えております。業績不振の状態とは、大まかに言うと質の高い論文をそれほど集めていないということです。さらに、購読者が割と少ないということです。長い歴史のある雑誌ですが、実は、われわれはこうした二つの難問題に必死に取り組んでいます。この二つの問題は、非常に難しい問題です。1921年の創刊から現在に至るまで、英語の雑誌ではありますが、英語が母国語ではない著者がなかなか多いです。最近では、特に韓国と中国の著者が多くなっています。正直に言うと、このような論文の英語は大雑把に言うと随分まずいです。これらを校正するには非常に多くの時間がかかります。多くの時間がかかると、やはり経済的な損もあり、編集者として頭を悩ませています。この問題をどう解決するか——。今、取り組んでいます。

2 オンライン上でのアクセス

第二の問題、それは『Eastern Buddhist』の論文をどのようにオンラインアクセスにするか、という点です。これは現在のホームページですが、あんまり魅力的でないウェブサイトのようで、これから新しくしようと思っています。しかし、デザインよりも重要な問題があります。それは、現在は、ウェブサイトから単に論文をダウンロードができないだけでなく、ウェブサイトですら論文をまったく読めない、ということです。

II 解決に向けて

これらの問題について私の考えを説明しようと思っています。

1 文法的に正しくきれいな英語で書かれた論文——優秀な翻訳者の雇用と著者サイドのプルーフリーディング

第一の問題、文法的に正しくきれいな英語で書かれた論文をどうやって掲載してゆくか、という問題に対しては二つの考えがあります。

まずは、技能が優れた翻訳者を雇用すること。これは当たり前のことかもしれませんが、日本のことわざで言うと、言うは易く行うは難し。専門的な知識と十分な日本語の運用能力のある方は非常に少ないのです。グリーン先生も同じような悩みをお持ちかと思いますが、日本人や中国人、韓国人が書いた質の良い論文があるが、それらをどうきれいに英語に訳すのか——私もグリーン先生も、翻訳者を探しても探してもなかなか見つけにくいのです。専門的な翻訳会社を作るのはとてもいいビジネスチャンスだと思います。私のビジネスアイデアをどうぞ盗んでください。技能が優れている翻訳者を見つけたら、手放さないように、優遇したほうがいいと思います。なくてはならない人ですから。

第2に、できる限り最初からきれいな英語で書かれた論文を採用すること——、これも簡単ではないことです。一つの可能性は論文を出したがる著者にこの負担を回す、つまり翻訳するのではなく、著者に本文を提出する前に、自分でプルーフリーディングをしてもらうように、『Eastern Buddhist』では今後、するつもりです。

ただ、この場合もやはり危険があります。英語が母国語ではない方の投稿が非常に少なくなるかもしれない、といった危険もあります。結局一番大事なことは言うまでもなく、一級の論文を集めて発行することです。この点、グリーン先生は、『Japan Review』で大成功を収めているので、あとのディスカッションで、グリーン先生にこの大成功の秘密を聞きたいなと思っています。

第二の問題に進む前に、ここで一点お話ししたいことがあります。私には、国際語としての英語について矛盾した思いがあります。私自身の研究は、ポストコロニアル主義という理論に非常に影響を受けています。そして一方では国際語としての英語は文化的な帝国主義の一種ではないでしょうかとの気がします。言語の帝国主義という現象ではないかと思っています。他方では研究者として編集者としても、やはり研究の国際発信の価値をもちろん理解しています。これは非常に

難しい問題です。

2 オープンアクセス化——ウェブサイトでのオープンアクセスと JSTOR

第二の難問題、論文をどのようにオープンアクセスにするかという点についても二つの考えがあります。まずは、自分たちのウェブサイトに掲載すること。自分たち、つまり『Eastern Buddhist』のウェブサイトです。既に述べたように、『Eastern Buddhist』では、まだウェブサイトに論文を載せていません。今後載せてゆく予定はあるのですが、どのようにするかはまだ未定です。実は今週、南山大学の南山宗教文化研究所に行き、研究者たちと相談する予定です。この研究所の刊行する宗教についての専門雑誌『Japanese Journal of Religious Studies』では、直接このウェブサイトから論文をダウンロードができ、非常に便利です。1960年（前身の『Contemporary Religions in Japan』の刊行時）の論文から今までの論文をすべて無料でダウンロードすることができます。先月発行した論文でも、誰でもすぐに無料でダウンロードができる。『Eastern Buddhist』でもこういうかたちをとろうかと思っています。

これは私には非常に面白いのですが、この雑誌では現在購読料をとっていませんが、購読料を廃止してから方が廃止以前よりはるかにもうけているそうです。なぜかというと、JSTOR という仲介会社のデータベースに入っているため、そのデータベースを通し世界のどこかの学者や、どこかの学生が論文を読むたびにお金が入るというわけです。このため、不思議なことに、購読料をとっていた時よりもよくもうけているそうです。実は『Eastern Buddhist』も、先月の終わりから JSTOR に入っています。入ったばかりですので、データはまだなく『Eastern Buddhist』も『Japanese Journal of Religious Studies』のようにもうけられるかどうかまだわかりませんが、幸運を祈っています。

今日では非常に当たり前なポイントだけについて話しまして、すみませんでした。